

平成 24 年 晩秋の大滝集落 —— 囲炉裏談議と写真 ——

大滝会特別会員 鹿摩 貞男

はじめに

平成 24 年 11 月 18 日（日）、この日かねてから気になっている「あゆいまつ」区間・旧新沢橋西側の明治期万世大路・森元巡査旧跡などを探訪する予定であった。

朝 8 時前、福島市内の自宅を出るときには青空が広がってきていたけれども、集合場所の旧大滝集落の大滝会事務所に着いたときには風雨が強くなっていた。気象庁の晴れるという予報に反して、一向に天気は良くなり、風雨はますます激しくなる一方であった。この日気温も大変低く、外気は 3 度くらいで、雨は時々雪に変わり、この後午後に行った二ツ小屋や板谷では積雪も見られた。福島市内で晴れていても大滝は雪というのが、大滝のこの時期特有の天候のようで、大滝の初雪日でもあったと思われる。最初は大会事務所で天候の回復を待っていたけれども、あまりにも寒いので長老沢（胡桃平）の渡辺正義さんの旧宅（明治天皇大滝御休所）に移動した。当日の参加者は、大滝会木村義吉会長、高野英治副会長、渡辺正義副会長、伊藤弘治理事、鹿摩貞男特別会員の 5 名である。

結局、昼まで待ったけれども天候は回復せず探訪会は延期となりました。その替わりと云うことでもありませんが、渡辺正義さん旧宅で囲炉裏の焚き火を囲みながら、大滝にまつわるいろいろなお話をお伺いすることが出来ました。このような本格的な囲炉裏で長い時間暖を取るなど、筆者にとってはおそらく初めての経験ではなかろうか。参加した皆様にとっても、何十年ぶりだと仰っている方もおられました。また、午後雨（雪）は小康状態となったので、晩秋の大滝集落の様子を写してみました。以下その囲炉裏談議の一部の紹介と晩秋の大滝集落の映像である。

【大滝囲炉裏談議】

玉座

福島県の県庁文書『万世大路事業誌』『雑記之部』（明治 14 年福島県土木課編）によると、万世大路の開通時には、米沢側からきて大滝に入ると室屋が 2 軒（旅人宿の宮内屋＝高野家、同じく中屋＝渡辺家と思われる）あったと記されている。室屋とは文字通り廻屋を意味するけれども、地方では旅人を泊めることもあり旅人宿を指すこともあったと思われる。

明治 14 年（1881 年）10 月 3 日、栗子山隧道米沢側でおこなわれた万世大路の開通式にご出席なさり、福島へ向かう途中で、明治天皇が御小休されたのが現存するこの渡辺家（旧中屋旅館）である。

暖をとりながら世間話をしている内に、この旧宅にはその時に明治天皇がお座りになった椅子が大切に保管されていると云うお話があった。見せて頂いたけれども、背凭れと肘掛とがついている回転式で、当時としてはなかなか立派なものであったと思われる。しかし残念ながら回転式椅子のその台座部分が失われている。渡辺家が市内の方に引っ越してからこのことのようにあるが、何者かが鍵を壊して侵入し持ち去ったのだという。この文字通りの玉座を、由緒のある椅子と知っての犯行なのかどうか勿論分からないけれども、持ち去った者は本当に不敬の輩である。この台座を是非返却して欲しいと思う。

また、明治天皇の御小休された部屋の四隅の天井には菊の御紋章があったそうである。しかし、これも何時の間にか無くなっていたという。これは、皆様がまだこの旧宅にお住まいの頃のことだろう

で、誠に大胆不敵な奴がいたものである。こちらの方も是非返却してほしいものである。

屋根の塗替え

明治初年に建築された茅葺き屋根の渡辺家はなかなか立派なものである。それこそ大黒柱がしっかりとしていて、100 数十年の風雪に耐えて今日まで存続している。戦後まもなくのことであったというが、ある大風の日、隣の高野家では家があまりにも揺れるので、危険を感じ子供達を隣家の渡辺家に避難させたことがあったという。それだけ頑丈に出来ていたと云うことであろう。

さて、この渡辺家の維持管理（保存）には、ご当主正義さんのなみならぬ努力があったようだ。昭和 54 年 5 月、渡辺家 4 代目となる正義さんが大滝集落最後の住民として市内の方に移られている。旧宅は、その後雨漏りがあり、昭和 57 年に茅葺き屋根をトタン屋根で覆われている。屋根の塗装は定期的に塗替えておられたという。ご兄弟や知人の方の協力をえておこなわれたようである。しかし、皆様ご高齢となり今回は専門業者に頼む予定であるという。ただ今年は、例の震災関連で屋根屋さんも立て込んでいられしくなかなかきて貰えないそうである。

隣家の渡辺清治さん旧宅もまだしっかりしている。このような貴重な歴史的史蹟・明治の旧家を公的に何とか保存する手段はないものであろうか。

渡辺正義さん宅は、戦前まで文部省指定（昭和 10 年 11 月文部省令第 400 号）の史蹟で、村において管理していたという。少し修理するにも、許可が必要だったそうで、幾ばくかの補助もあったようだが維持管理は容易でなかったという。戦後は、おかまいなしということになりその維持管理は個人的に負担されているわけである。

メジロ(虹の一種)

黙って聞いていると皆様の会話の中に、メジロという単語が盛んに出て来る。筆者には小鳥のメジロ（目白）しか思い浮かばないので、どうも話の辻褄が合わない。聞き直してみると、それはどうやら虹のことを言っているらしい。虹の種類は大変多いけれども、その中で蠅より少し大き目の種類のことを指すようだ。その名前の由来は定かでないが、大滝では昔からそう言い慣わしているようで、虹の複眼の色が白っぽく見えることから云われているのかも知れない。メジロは、お盆の時期に水の綺麗な西川付近に旬日にわたり大発生するという。このメジロは、人間の汗の臭いなどを大変好むようで、炭焼きや山仕事から帰宅する途中、旧西川橋辺りでメジロの大群に纏わりつかれることがあったそうである。大滝会 HP 参照 (<http://ootaki.xsrv.jp/page154.html> ページ末尾にメジロの写真有)

「あゆいまつ」（旧西川橋から 700m ほど米沢側へ進んだ危険な断崖箇所のこと。大滝会 HP 参照 <http://ootaki.xsrv.jp/page149.html>）付近では、戦後昭和 30 年代のはじめの頃の夏、米沢方面に向かっていた乗用車がハンドル操作を誤り十数メートル崖下の小川に転落し 5 名の方々が亡くなられる事故があったという。これは、夏場で暑いことから窓を開けたまま走らせて来たため、メジロが運転席に侵入、運転手がそれを追い払おうとして運転を誤り転落したと云うことである。

また、こんなこともあったと云う。

大滝（大滝製炭組合）では、炭焼きのため山林を営林署から借り立木の払い下げを受けていた。その伐採区画は 1 年ごとに移動し 30 年で一巡するそうである。その区切り区切りに営林局の検査があり、戦後昭和 30 年代前半のことであったがその時に高野家に泊まれた。検査がお盆の時期になったため、メジロのこともあり時期をずらすようお願いしたがその時は変更にならずお盆の前後に検査

となった。

さて、営林局の方達は仕事を終え、夕方に会食をはじめようとしていて、部屋の中が暑いので窓を開けっ放しにしておいたらしい。そこに、山仕事を終えた大滝の方々が次々に戻ってきて、皆汗をかいているので西川辺りからメジロの大群に纏わりつかれたままで集落に入ってきた。辺りが真っ暗なのに高野家の窓だけが開いていて明るくなっている。ついてきたメジロは一斉に窓を目がけて飛んで行ったから、さあ大変です。メジロの大群が部屋に侵入してきて大騒ぎになったと云うことである。会食の場の混乱ぶりが目に浮かぶようである。営林局の方々がどうなったか分からないけれども、メジロに刺されると痛く、人によっては刺されたところが腫れ上がる人もいると云うことである。

メジロは夏の風物詩ではあるが大滝の人々にとっては全く迷惑な存在であったようだ。

月の輪熊

大滝の方々は、何らかの形で熊との関わりを持たれているようである。出会い頭に熊に遭遇したなど面白いと言っては大変失礼になるけれども、様々なエピソードが伝わっているようである。

ここでは、木村義吉会長さんのお父上の木村要吉様のお話を紹介したいと思う。戦後間もない昭和25年前後のことである。場所は、長老沢（胡桃平）地区の小川の川向かいで、まだ畑があった頃である。熊が出たと云う通報があり要吉さんなど数名が押っ取り刀で駆けつけた。要吉さんは、当時熊撃ちの名手として知られていた。要吉さんは、急いで現場に駆けつけたため猟銃にはまだ弾込めをしていなかったという。

ところが、通報のあった場所の手前で突然熊が現れ仁王立ちとなって駆けつけた一行を襲おうとした。要吉さんは、その場で素早く猟銃に弾を込め熊の月輪を目がけて発砲し見事に熊を射止めたという。熊との距離は僅かで、銃身が届くほどであったというからまさに文字通り間一髪というところであった。一緒に駆けつけた人たちは、腰が抜けて立つことが出来なかったそうで、その恐怖感は察するに余りある。

その他、大滝の親御さん達は 50 歳になると引退して家督を譲ってしまうので、ご長男が大変苦労したと云うこと。大滝は豪雪地帯、一晩で 7、80 cm 積もるということもあり除雪が間に合わないので、自家用車は冬の間、国道 13 号（駐車帯）の方に避難させておいたことなど。今回報告の他にも様々なお話をお伺いしました。

【添付写真について】

添付の写真は、「平成 24 年晩秋の大滝集落」の様子である（11 月 18 日）。家屋や屋敷跡の人名は、原則として昭和 30 年のものを使用した。

（大滝会 HP 参照 <http://ootaki.xsrv.jp/S30ootakijyuukyo.html>）。

また付録の写真として、鍋越地区（旧大鍋橋）、石小屋地区（新沢）、板谷地区等（いずれも 11 月 18 日）を添付した。

次頁以降に「平成 24 年晩秋の大滝集落」記録写真を添付する。

「平成 24 年晩秋の大滝集落」写真集



1 明治天皇お座りの椅子（台座は盗難）と
当主渡辺正義さん H241118



2 囲炉裏囲んで大滝談議
左から木村義吉氏・高野英治氏
渡辺正義氏(当主)・筆者 鹿摩貞男



3 渡辺家旧宅（旧旅館中屋・明治天皇大滝御休所、
明治 14 年 10 月 3 日）にて。囲炉裏囲んで大滝談議
左から伊藤弘治氏・木村義吉氏・高野英治氏・渡辺
正義氏(当主)



4 囲炉裏囲んで、櫛火(ほだび)となる



5 旧国道 13 号・旧万世大路（以下同じ）、高野孝治
さん宅跡（左空地）付近から福島側を望む。手前
渡辺要一さん宅（大滝御休所）、奥渡辺清治さん宅。



6 紺野一恣さん宅跡（左）付近から米沢側を
望む。写真右手前から渡辺清治さん旧宅、
渡辺要一さん旧宅、高野孝治さん宅跡。



7 旧西川橋（旧国道 13 号・万世大路）と
現国道 13 号西川橋（上）



8 高欄（欄干）のない旧西川橋、
西川上流左岸から望む



9 旧西川橋福島側から大滝集落方向を望む。



10 渡辺角右衛門さん宅（右）跡付近から福島側を望む



11 渡辺清治さん旧宅（左）を米沢側から望む



12 瀬戸の沢と国道取付道路（旧バス停）、
右側渡辺清治さん旧宅。



13 山岸鶴蔵さん宅跡(右)付近から福島方面(胡桃橋)を望む。
中央奥の杉林が旧建設省栗子大滝国道出張所跡



14 胡桃橋、福島側から米沢方面を望む



15 胡桃橋から小川下流を望む



16 手前「入イラ澤橋」から「いら沢橋」・福島方面を望む



17 小川に合流するイラ沢(右)



18 旧大滝分校(山神神社)入口付近から「いら沢橋」・米沢方面を望む。



19 旧大滝分校（山神神社）入口付近から大滝橋方面を望む。左建物は大滝会事務所、その手前は蒲倉要さん宅跡（「駄賃付馬子唄」作者奥野ミサオ様ご実家）



20 旧大滝橋福島側から旧大滝分校・米沢方面を望む。右側建物（屋根）は大滝会事務所、斜向かいの木村要吉さん宅跡。



21 旧大滝橋、上流から望む



22 大滝川、旧大滝橋上流を望む。右柱木新吉さん宅跡



23 旧大滝橋福島側から曲がり角を望む。左上の防雪柵は現国道 13 号



24 曲がり角付近から福島側杉林（写真左側旧木炭倉庫付近）を望む。右は赤岩道。



25 旧我孫子富三さん宅跡（写真右）付近から
米沢方面・曲がり角を望む



26 米沢側から旧葭沢橋方面を望む



27 旧葭沢橋、福島側から米沢方面を望む



28 まんじゅ屋さん（左）付近から旧葭沢橋
・米沢方面を望む



29 復活旧万世大路。写真中央下、大滝集落入口
（現道大滝橋アンダーパス箇所）・米沢方面を望む。
右側は残存福寿草山。



30 復活旧万世大路（大滝集落進入路）。
現国道13号からの入口を米沢側から望む。
左側旧栗子国道改築工事原石山跡、右側奥は
架設中の新長老沢3号橋（東北中央自動車道）。



31 旧大鍋橋橋台遺構（手前）と現大鍋橋（奥）、
下流側から望む。左福島側、右米沢側。右下の流末
は付替えられた鍋越沢（この沢に旧小鍋橋在りし）



32 旧大鍋橋左岸側から小川下流を望む H24118



33 全山紅葉、大滝共同墓地を望む。右側の擁壁は
工事中の東北中央自動車道（チェーンベース箇所）。



34 初雪、旧万世大路「新沢橋」上流部の雪化粧。



35 米沢市板谷にも本格的な雪。栗子国際スキー場南側
（中央、雪山の裏がスキー場）を望む。
現国道 13 号・山形県道 154 号線入口から撮影。



36 板谷集落周囲の山々に本格的な雪あり。
猿軍団、住宅地空き地に現る（車中から撮影）。
H241118

終